

三河 アララギ

2020年12月 師走 しわす

十二月号

第六十七卷 第十二号



ニューヨーク日記(170) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

NOREETUH

Blue Shoe Diaries



今ニューヨークでハワイアン料理がちょっと注目されてます。スパムむすびばかりでなくオシャレなレストランでも。ミシュランレストランで料理していたシェフが自分のお店を持ったのがその中の一つ、去年開いたnoretuhって言うイーストビレッジのお店。モダンな感じで食べるまで味がハワイアンって気付かない感じ。面白くて甘さをうまくバランスするんだなあって思った。例えば、あん肝のトルシオンも甘いハワイアンパンが付いてきたり。

Hawaiian food is hot right now in New York. And one restaurant that is getting a lot of attention is noretuh in the East Village. The chef and wine director are both Per Se alumni so you see high-end refinement in the dishes and approach to the food. One of the highlights for me was the monkfish liver torchon served with toasted King's Hawaiian bread. Nicely spreadable on the bread, what's described as passion fruit gelee tasted like mandarins to me. And highlighted by a sprinkle of karasumi or bottarga? That made the dish for me. Yum!

アカンサスの徑

御津磯夫

おほけなき千手の誓たのもしくわが冬葵生きのこりけり

丸き葉のかすかになりて生きをりしわが冬葵に對面したり

祀るなき信なきわれに早く憑け足の裏なるまづ歩き神

ま昼間のわれのねむりをおどろかせ硝子戸を打ちて小鳥逃げたる

わが病よろしき今日をよろこびてしばらく坐るセリーナの前に

はるばると地球の半分を来たまへば床に挿す花は白玉椿

アンデスの高きに棲める毛ものより編みし毛のものわれに着せしむ

一言も相通ぜねど紅梅の花の散りくる下に招かむ

病みのちの細きからだに縫紋の黒き羽織を着てあひあはむ

這ひはじめしエリカ玉由はわが孫にてアルゼンチンの小地主とぞ

三河アララギ歌集Ⅶ

大須賀寿恵

もくろみは布団を干さむことなれどわくわくとして早く起きたり
しめじめと鉄平石に雨ふりて翹たたみをしじみ蝶ひとる
鍋の湯にをどりつつゐて鳴門わかめみるみる緑にふくらみてゆく
浅漬の胡瓜かみつつ奥の歯の健やかなるを吾はたのしむ
水運び来たれる如露に入れて帰るけさ収穫の曲れる胡瓜
樋つたふ雨だれの音は一分ばかりひでり続きの雨通りすぐ
竹の杖つきて護岸の階くだるわれに鴨らの翔びたちにつけり
ゆゑのなき涙湧きくる朝なり炎をあげて紙屑を燃す
松葉画廊に友の花の画を観にゆかむ幾年振りに草履をはきて
梅雨空をま白き千切れ雲ひとつ静かに流れつつ融けてゆきたり

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

藪かげに忘れらるたる柿七つ翁もぎ来る手柄のごとく

出でゆきて遊ばねどわが奥の庭あした夕べの紅葉かがやく

買物に遠く出で来てなほ見ゆるわが祖の城址御堂の山は

城址の御堂山の青きとがり見ゆ今日走りゆくバスの窓にも

哀しきこと何もなくて赤松の幹の夕映えたちまちに消ゆ

海の上の夕映え残る低き空二日ばかりの月の光れり

消毒薬に雙手を浸す朝の窓つひに錦木のもみぢ了りぬ

年々にはつはつ萌ゆる諸葛菜あり父が接木の柿の木の下

遠祖の墓石の上にそびえつつ丹野城址御堂山の冬の朝霧

家のうちの夜の見廻りのひとところ夜風に冬の風鈴の鳴る

ははぎくち

河原静誠

引馬野に耕地整理の行はれ新墾道に萩原もなし

白鷺の舞ひ下りて居り安礼乃埼早苗を植うる人影もみゆ

引馬野の神の宮居は荒れはてて萩原もなく潮風の吹く

園児等と日毎に通ふ此の路を安礼乃埼とぞ今日は聞きたらい

都橋御所橋等をわたり来て老松ならば行在所の跡

持統帝の行在所跡の松蔭に海苔採る小舟つながれてあり

役小角の拓きしと伝ふ細道の羊歯かきわけて蕨をつみぬ

高速道路と今はなりたる吾が山につつじ手折りし去年を想ふ

石仏草むらにいます坂道を登りて着きぬ塔の峯山

塔の峯の五重の塔は崩れ落ち笹むらふかく礎残る

思ひ出の根岸

蒲郡 岡本八千代

独りにてかつて根岸へゆきし事のわが小さき手帳の出でて来つ嗚呼^あ

鶯^{うぐいす}亭の岡野の汁粉も書きてあるああ急にお汁粉欲くなりくる

「何もかも夫をも忘れて根岸へ来ぬ」と書きてありたり楽しかりきよ

友に会ふ企てほぐれてたゞひとり上野の森の木もれ陽の中

手帳には新幹線↓東京―上野―鶯谷―うぐいす横丁―根岸の里よと

「鶯^{うぐいす}亭」そこにて岡野のお汁粉^の呑み上野岸へと音無川に沿^そひき

何事も今は思ひ出ばかりなり何処へも行けぬ古い人われかな

秋草の赤きミヅヒキ膝ひざにふれふれつつ歩みし嗚呼子規庵の庭

わが庭にもミヅヒキ草の赤き花花はな々々ぼうぼうに乱れ咲きをり

夫がよく腰かけてゐし亀石に苔青く生えてをりしに驚おどろく

いつしかに金木犀の花ざかりそれにも気付かず秋了おわらむとす

温めて独り呑むこのカフェオーレ今日きょうは今日の日のわが事過ぎつつ

「西せい窓そうの燭ともしび」を剪りて語らふ人だあれも無きまま今宵もすぎゆく

わが住める西浦の町にも夕暮の鐘が鳴るなりこのロマンチックよ

夕さればダチュラ百花の白花よ南のガラスの窓にも触ふれつつ

歌会の夢

豊川 弓谷 久子

縁側に立ちて子の指す方を見る低く大きく月浮かびをり

少しだけ赤味を帯びし月浮かぶ今宵は中秋の名月を見る

童心に還りて小さく口ずさむお月さん幾つ十三七つ

なつかしさ胸にあふれて目覚めたり歌会の夢を又見てゐたり

正面に御津先生が座られて始まる歌会盛会なりき

白髪にピンクのブラウス似合ひたるスエ先生とも夢の中

我に唯一の楽しき思い出休まずに只休まずに通いし歌会

秋霖と言ふ雨なのか三日間しとしと雨の降り続きをり

マラカスの黄の花に舞ふ黄色の蝶雨上がりたり秋空深し

月一度姪の来る日よちらし寿司朝より支度して待ちぬ

看護師歴四十四年の姪なれば我の体調気づかい呉るる

はやばやと身支度をして子の車待ちをり今日は検診日なり

車窓より刈入れ済みし田眺めゆくひと月ぶりの我の外出

我の一人の散歩道なりこの裏道に今日も人影見あたらず

光陰は矢の如しとか台風の上陸も無く神無月逝きぬ

日向ぼっぴ

東京 今泉 由利

太陽の表面温度の六千度頂度よくして私に来る

私に来し太陽光の終着点しつかり受けるこの朝の日を

太陽より直接私の居間に来し尊きものよぬくぬくとゐて

いつの世に石と化したか小魚と今日の朝日を二等分

私の管轄であり三本の木今日の朝日の浴ねしやさし

トーストに朝日を乗せて食みにけり体内にも太陽とどく

メ切り日となりたる原稿用紙にも輝やききたり朝の太陽

朝の日のうれしきこともたちまちに過ぎてゆきたり私を残し

三河なる黒土つきたる里芋よあのことこのこと思いの沸きく

あのひとはこのひともまた如何にかと日向ぼつこの温温ぬくぬくのとき

九条ねぎツンと鋭き先つぽもひと口サイズの小口切にて

食べ残す根つこ部分の水栽培九条ねぎの延び立つ窓の辺

ブロッケン現象の輪の中に飛行機ありきパタゴニアを飛びき

祖母よりのまるき珊瑚のネックレス光合成にて育ちしものか

百五十億年前と宇宙の始めこんなに長い私のルーツ

鬼まんじゅう

豊川 安藤 和代

朝未だき野は静もりて弓張りの山脈を背にサギ低く舞う

久しぶり京都の孫が帰省する痛みし腰がシャキツとのびる

一病を持つ身であればこの夏よ迎うる秋をひとり喜ぶ

絵手紙に露草描けば志げさんと上野坂思う秋のまん中

敬老の日孫のくれたる飯茶碗新米も又ひとときわ旨し

入つ陽が東の雲を染めてゆくそうだ明日は大根蒔かん

音羽川善行寺川しじみ川吾が家近くのロマンある川

ポストまで吾れの歩みの遅ければ幼と犬が追い越してゆく

病む友に頑張れなどは言えずして今年の米の豊作を告ぐ

秋うらら鬼まんじゅうをつくりたり鬼がいっばい秋がいっばい

風に舞う落葉の音にもしやとて夫かと門にしばし立つ朝

オレンジの花

春日井 清澤 範子

門にある木犀の香り満々にオレンジの花たわわに咲きぬ

木犀の二度花つきて匂ひ来るいつしか虫の声も聞こえず

夫も吾も足腰痛み菜園も秋の虫の宝庫なりけり

夫が植えし南瓜大安吉日に穫ると決めたり甘くほくほく

ぜんざいの甘味程よく定まりぬお椀にそそぐ三時のおやつ

愛知県に勤めし夫の受賞せし置時計確かに時を刻めり

体調をみながら庭の剪定す夫は切る人吾拾う人

かかりつけ医にて血液検査異状なしまだまだ頑張る主婦の仕事を

夫の髪をオールバックに切り揃え刈り上げるのも吾の勤めと

吾の眼は二重に見えて不自由と今日は悩のMRをとる

歩行困難の吾を乗せきて車椅子夫は引くなり感謝あるのみ

つばやき

大阪 伊藤忠男

一年の区切りを迎え振り返る私の人生色褪せて見え
目減りする私の人生短くも成すべきことのなほ多かりき
我が思い私の喜び我が望みそれとて同じあり得ざるなり
雨音に眠り覚まされ寝付かれぬ夜明けは先のその先なのに
秋晴れも心の曇り消えぬまま祭り太鼓にお囃子の笛
久しぶり東京目指す列車内席空け会話避ける気遣い
ズームまた画像乱れて手直しに慌て操作にミスを重ねる
強がりもここまでなりや科学無視天は未来の破滅望まず
嘘に嘘重ね誠にすり替える同じ価値観ならざるなりや
銃を持ち己は己れが守るのが自由なりとはこれ履き違い
あれはミスこれも間違い予想外いつ支給なるあの支援金

解体工事

東京 矢崎直人

毎日の一つ一つの積み重ね失敗重ね挫けず前へ

秋の雨スカイツリーの尖端光る周りの空の黒の際立ち

町の人足元軽き秋の朝ジョギングするによき季節なり

雨の音静けさに聴く小夜更けて日本の秋のしとしと降る

番いの蝶螺旋を描いて舞い上がり一つに重なり空に消えゆく

銭湯の壁の絵見えて足をとめ解体工事で奥の覗ける

銭湯の壁からリニアモーターカー山並み白く旅情を誘う

銭湯の壁の絵一夜で外されて煙突ぼつねん淋しく立てり

焦らずに出来るペースで出来るだけ逸る気持ち空を見て抑え

この夏は見かけずにいたヒキガエル冬眠前に顔見せにきた

彼岸花

東京 森岡陽子

赤坂の茶屋で始めて黄の色のほととぎすの花黄蝶舞うよな

この場所に去年も今年も彼岸花墓に向ふや石段の脇

ニユースより見なれぬ国もマスク顔ワインの並ぶ石畳の小路で

夕辺には虫の鳴き声はたと止み冬の訪れ何歩近づく

二月より美容院にはまだ恐く伸びた髪の毛ゴムで結びぬ

久々の秋晴れの下街路樹の葉間々に赤き花水木の実

今一つ雲のじゃまする小望月明日はハロウィン望月満月

この夏の暑さをみんな取り込めしぐんぐん伸びた草枯はじむ

散歩道色づき出し柿の実を見上ぐる我の足元にポトリ

鳴き声はまだまだ子供のカラス達池の周りの柵に一ならび

中秋の名月

豊川 白井 信昭

なだらかに暗める林奥白咲きの彼岸花数多今を盛りと

日は没ちて南遠く煌煌とナトリウム灯の橙の輝き

枝分けの八尺伸びたるバラの芽のいと柔らかし擁壁に垂る

角口の端に日除けとて立て掛けるベニヤ板またダンボールなど

補強なる鉄筋幾本何箇所も組み上げにけり十月下旬

風ぎいたる今宵門口白白とジャスミンの花十五夜の月

満月の今夜明かるし門の道孫を見送る中秋の名月

匠真のせべビーカー押す夕つ方農道をゆく会う人なしに

音羽川土手一面に直ぐ立ちてセイダカアワダチソウ黄の輝き

コロナ禍の持統祭の神事なし哀しくもあり行在所跡

宇宙は涯なし

蒲郡 杉浦恵美子

ああ今朝はシャッター上がりて蜂蜜屋老婆がひとり商ひて居り

店前を通過する度思ひ馳す閉まりしときの小さな蜂蜜屋

蜜柑花やクロガネモチやレンゲ蜜それしかないけどこの店が好き

磨りガラスやもりが逆さに這っている君もひとりかわたしも同じ

磨りガラスあちらに半年張り付けるやもりはときには番ひにてあり

たったひとつ流星見つけぬオリオン座これにて足れり秋の夜寒は

灯を消して夜寒の空を眺め居り父母居ぬ夫居ぬ宇宙は涯なし

秋天の我が夫育ちし街の方目指せど夫は何処にも居ない

叶はぬと判つてゐるが夫と共に秋空この街散策したい

博物館万燈祭のお囃子が切りなく響く秋昼下がり

さあ帰ろう半日気ままに過ごしたり我が家に誰も待ちては居ぬが

五人組四人に減りてお地蔵の接待し居り日曜の朝

感謝の日々を

横浜 阿部 淑子

エーゼット創業祭十周年夫と通いて第二の故郷

ポランティアのメロディポケット来訪しなつかしき歌に酔いしれる時

秩父のいちよう五百本サクサク歩く足音は秋

真夏中せつせと咲きしハイビスカス初冬の朝も眩く開く

東北の熊の出没茂くなり花火も恐れずマスカットむさぼる

愛媛より挽^{もぎ}たてみかん送られこし袋アルベト丸ごと美味しい

百歳を越える長寿者八万人今を大事に感謝の日々を

童謡

豊川 山口千恵子

田の道を今日は通りて行かむかな介護施設の前を曲りて

むぞうさに黒髪一つに束ねつつ大学四年ひな子すこやか

声揃へ童謡うたふ夫とわれひな子のひけるピアノに合はせて

暗がりに眼を閉じてききたる何処で鳴くや虫の声々

みのりたる稲田の上をばらばらと雀の群はとび立ちぬ

道畔の草の中より白々と彼岸花の蒼出ではじめたり

かたまりて彼岸花の咲きにけり道端赤くいろどりにつつ

ゆつくりと田の道自転車はしらせる十月の風心地良きかな

コンバインに稲刈りしてをり田の道に藁の香りのただよひてをり

白砂のダチュラは咲けり夕べにはほのかに香りのあたりにただよふ

水

豊川 夏目勝弘

コップの水に落せし氷片ハジケル音ようやく秋となりてゆくのか
汚れし水流しに流す拘かかわりなきGOTOトラベルのニュースばかりぞ
水割りの氷を作ることなくなり今夜の熱爛のしみくるうれし

朝風呂が常となりをりこの朝は風呂の温度は熱きままなり

この朝の水道の水の冷えびえし猛暑の日日が一瞬よぎる

雨樋を溢れし雨水滝をなし庭土流れ小石の川原

空缶の水に細きボーフラが上下してをりここにも命

咽の渴き闇に起き立ち台所今夜は中秋の名月なりき

一口の水に潤ひ庭に出づ今夜は雲の一つなき中天

水なくば生きてはゆけぬされどまた豪雨の水が人を死なせる

モノ総てに上下左右表裏行きたき道は中なる道ぞ

濁流あり日照がつづけば細る川柿田川の流れでありたし

『いじやよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

和ダンスの隠し抽出しコトコトと開けたれば恋し^{はは}妣のことはメモ
針仕事のすきだつた母夜なべしてモンペや足袋など逢ひてくれにき

三田美奈子

今日もまた同じ話題に盛り上がる母とあやちゃん日々是好日^{よきひ}
庭先に今日また来たる野良猫の飼ふも能はず何処に去るや

水野絹子

彼岸すぎ種まき終へしその夜に影響大なる台風の発生
台風の進路の行方はわからねど年寄り我等そなへは万全

牧原規恵

春先に植ゑたるゴーヤ収穫は六個のみにて夏は終はりぬ
終電を降りて歩みぬ暗き道に自販機五つのほの明かりかな

稲吉友江

しばらくは何処にも行けぬ籠もる日々しきりに思ふ人魚姫の国
ポツポツと降り出しし雨いま少し渡りて行かな竹島の橋

鈴木美耶子

孟蘭盆会令和生まれの嬰子よ自肅の中にも笑顔でリモート
レモン色のアンドレスの乙女庭に咲く処暑の風受けかすかにゆれをり

吉見幸子

音がする何かの音は遠くからこれだけの気配の夕まぐれ

牧原正枝

お供へと娘の並べしは「日清焼きそば」お下がりはわが食料と言ふ

二冊目の十年日記の終はる今人生ドラマはまだまだ波乱か

森厚子

求むれど十年日記の今はなく五年日記を心新たに

秋風のそよ吹く庭に萩ゆれをりその花影に黒き猫一匹

山崎俊子

月明るき庭の片へに曼殊沙華叔母は逝きに偲ばるるかな

現代学生百人一首

東洋大学

空っぽのおばあちゃん家の犬小屋で夏に来るたび白い尾探す

麗澤中学校一年（千葉県） 山口 義仁

遅々と行く水害被災地ボランティア俺でもできた小さなちから

国士館中学校二年（東京都） 原田 晶平

AIは人間よりも仕事する将来の夢無くなっちゃうよ

星美学園中学校一年（東京都） 古市 真季

「せんせい」と足に抱きつく子供たちまた膨らんだ保育士の夢

貞静学園高等学校一年（東京都） 角屋麻由音

「父は嫌い」友が言うたび思い出す单身赴任の父の笑顔を

東京学芸大学附属小金井中学校二年（東京都） 藤友実緒

おめでどうそれを言うのにどれほどの脳内会議を重ねたことか

練馬区立貫井中学校二年（東京都） 岩崎心紀

思いこめ夢にまでみた初舞台覚悟を決めて楽器手にとる

神奈川大学附属中学校一年（神奈川県） 宮野結衣

除雪車の仕事を終えた祖父の靴まだ濡れている登校する朝

東京学館新潟高等学校一年（新潟県） 五十嵐翔亜

贈呈誌

森岡陽子

月虹 136号

○ベランダの廂の先の三日月を指差して見る背伸びして見る

八幡道子

○未曾有とう字面つらつら眺むらばブラックホールへ吸い込まれゆく

水上信子

○いつ知らに極暑の去りて温き茶を欲りいる午後の陽は傾けり

成島哲子

○一間の長さなれども早瀬ありはつか離れば聞こえずなりぬ

鮫島満

○崖崩れ警戒地域と表示ある小道に古ふ軍馬慰霊碑

小林勝

冬雷 11月号

○チリチリと読経の響く木の下に蟬を弔ふ蟻の葬列

嶋田正之

○汚れたるままにこころは澱めども沈殿させて静かに生きん

天野克彦

○藤棚の葉陰に一房返り花ひそと咲きをり炎暑の中に

有泉泰子

○天満宮に放し飼いなるチャボの群直射の当たるジャリに腹這う

酒向陸江

○永劫といふことばをば作りたる人あり突然思ふその人誰かと

鷺司法子

○作りかけの蜘蛛の巣昨夜の雨を受け横糸のみがしづくに光る

鈴木やよい

○国籍を捨てたる友と捨てぬわれどちらも悩む異国での老い

ブレイクあずさ

○寺庭の陰りを避けて梅を干す姉さんかぶりの若き僧らは

糸賀浩子

○ブルービーといふ幸せを運ぶ蜂あきの阿蘇野にあらはるとぞ

古嶋せい子

○紫陽花の枯れるる茎に蔓を張り濃き紫の朝顔あまた

中島千加子

日本列島大音頭

高橋育郎 作詞

1 月は東に 日は西に

日本列島 でつかいな

太平洋の 轟聞いて

日本海を ひとかかえ

空を見上げりや 天の川

*ソーレどんといけ どんとこい

ソーレどんといけ よいとこせ

2 花の東京 旅立てば

みえてきました 富士の山

あたまにくつきり 冠雲だ

世界一だよ さつき晴れ

名古屋は天下の 金の鯨

*くりかえし

3 西の栄えの 京阪神

つづく島々 瀬戸の海

ひねもすのたり 舟路をゆけば

頭上にかかる 大橋の

またその上に 虹の橋

*くりかえし

4 酒は飲め飲め 飲みとるぞ

それが男の 心意気

女は愛嬌よ おてもやん

九州火の国 燃えている

阿蘇に霧島 桜島

*くりかえし

5 ふるさとの山 ありがたい

言うことないねと 啄木さん

銀河鉄道 賢治が行くよ

安達太良阿武隈 指さして

ほんとの空です 智恵子さん

*くりかえし

6 北の大地は 原始林

広野果てなく 川筋ひかる

クマにエゾジカ キタキツネ

ロマンを語ろう 美味し国

*くりかえし

『俳句』

潮の香の失せし流木暮の秋

山元正規

龍太の空抜げるやうに葡萄挽ぐ

破蓮田隙間だらけの風の道

石路高く咲き野佛の微笑みぬ

松本周二

十三夜上り框の花梨照る

天狗茸あやしき月の弁天堂

狛犬も欠伸してゐる神の留守

浜田紀政

秋入日海を燃やして沈みゆく

秋夕焼太宰渡りし跨線橋

石畳踏まれしままの銀杏の実

田中清秀

鬼の子の逆さに下がる雨上がり

枯るる庭幼き声に温もれり

秋高し音吸はれゆく鹿威

重野善恵

ちちろ鳴く火星連れたる良夜かな

そぞろ寒馴染みのそば屋店仕舞

城跡の苔の石がき秋入日

森岡陽子

寂れゆく空家の庭のこぼれ萩

棗の実乃木大将の殉死の間

もの多き机上にひとつくぬぎの実

植村公女

宗匠の弁当置かる秋句会

表札の外されしあと夕月夜

曼殊沙華誰かに押され墓参り

木村歩歩

葛の花見え隠れして裏山路

秋色に山繋ぎたる送電路

群れ飛ぶも明日は来ぬかも秋あかね

鯰ヶ沢てふ名の町や沙魚の潮

今泉如雲

階段に靴音ひびく寒露かな

朽ち崩れたる湯宿かな烏瓜

手のとどくところに飛ぶも恋蛭

岩崎あつ子

祖母縫ひし色足袋残る昭和の日

山手線乗り替冬の近きかな

小ばさみの小さき鈴や十三夜

千体の御仏かがよふ秋深し

今泉由利

釈尊を彫りあげにけり臘月会

天麩羅は菊の花です新走り

ひと袋岩松院のむかご提げ

松の木に幹巻といふあたたかさ

自らの心のほどの温め酒

かさね吟行会

「吟行会が中止になったので④」 10月

田中清秀

十月九日のかさね吟行会は中止となった。今回は新型コロナウイルスの影響ではなく、台風の接近のためである。

台風十四号は十月五日に太平洋上で発生し、ゆっくりと北上し秋雨前線を刺激して伊豆諸島を中心に大雨を降らせた。十二日には南方洋上へ引き返して熱帯低気圧に変わったが、所謂のろのろ台風で進路の予測が難しく、東京湾アクアラインで木更津まで行く予定としていたのでやむなく取り止めとなった。

毎年多くの台風が発生しその度に被害を受けている日本だが、今年は珍しく本土に上陸した台風は一つもない、これは十二年ぶりと言われている。コロナ禍に煩わされている中で、台風の災害が少なかったことは本当に有り難い話である。

毎日、新型コロナウイルスの感染者や重傷者数が報道されているが、なかなか終息の兆しが見えない。そして、社会生

活の大きな変化、学校や仕事のやり方など多方面に亘って色々な影響が出ている。そんな中で、交通事故の死者数は減っていると言う、昨年度は3200人余りだったが新型コロナウイルスの影響かさらに減少、政府目標の年間2500人以下が達成されそうな状況なのだ。人の往來の減少に加えて慎重な運転が社会的な傾向に繋がったとすれば、これは大変結構な話である。

逆にコロナ禍の影響なのか自殺者が増えているらしい。特に七月以降三ヶ月間連続して増加、特に芸能人の自殺報道などにより、女性や若年層の自殺者が多いという。近年は減少傾向にあったのに、ステイホームのストレスなどの社会的要因で自殺に追い込まれる人が13000人を上回るのではないかと心配されている。新型コロナウイルスによる直接的な死亡者が1783人（十月三十一日現在）であることを考えるとこの数字は憂えるべき実態ではないだろうか。

視点は少し違うが、今年の四月から民法が改正されている。ご存じのように民法は社会生活をおくる上で最も基本となる法律で、明治二十九年に制定されてから約百二十年間ほとんど見直しが行われていない。今回の改

正は債権法に関連するものを中心なので、知らなくても
普段の社会生活では支障なく過ごせる内容かも知れない。
ただ、もしもコロナ騒ぎがなければマスクミが取り
上げるなど、もう少し関心を持たれたのではないか。こ
んなところにもコロナ禍の悪影響が出ていると思われる。

また話しは変わるが、私自身、運動不足の解消に毎朝
のテレビ体操を行うようになった。毎日少しでも身体を
動かすことは健康に良いらしい、何年かぶりの「ラジオ
体操」、今後とも継続して行きたいと思っている。長生
きに繋がるなら新型コロナウイルスに感謝しなければなら
ない。他にも新型コロナの良い影響として、大気汚染の一
時的な改善やインフルエンザの流行防止への効果なども
言われているが、いずれにしても、このコロナ禍の早期の
終息と平穏な社会生活が早く戻ることを祈るのみである。

■かさね吟行会■

日時 二〇二〇年十二月十一日（金）

場所 野毛山公園

集合 桜木町南口改札口十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』(二〇四) 丸山酔宵子

『茂田井間の宿(もたいあいのしゆく)』

江戸日本橋と京都三条大橋を結ぶ中山道は北回りの内陸部を通り69の宿場が設けられていた。徳川家茂に降嫁した皇女和宮が江戸に向かった街道であるとか、島崎藤村「夜明け前」の舞台となった馬籠宿などもあり、大変浪漫を掻き立てられる。

そんな中山道の江戸から数えて25番目の長野佐久市にある望月宿と26番目の芦田宿の中間。米処(どころ)、酒処(どころ)に茂田井間の宿(もたいあいのしゆく)がある。「間の宿(あいのしゆく)」とは、江戸幕府の本宿保護のため本宿以外の宿泊を禁令とし、茂田井村は旅籠を持たない休憩処のみとなった。

清らかな用水が流れる坂道には古い土蔵が並び、大澤酒造と武重本家酒造の2件の造酒屋が古い佇まいで酒造りを続けている。

大澤酒造は江戸初期より酒造りを始め、茂田井村の名主も長く「明鏡止水」や「善光寺秘蔵酒」などの銘酒を造っている。敷地内には「しなの山林美術館」(大澤邦雄、神津港人の絵画を展示)、民俗資料館(小諸藩より拝領した甲冑などを展示)があるが、その一角に、墨筆豊かな*『國酒 内閣総理大臣 安倍晋三』と揮毫された色紙が飾られている。よくよく見ると、その横、その上には小渕恵三、小泉純一郎、麻生太郎、鳩山由紀夫など歴代内閣総理大臣の『國酒』の色紙が飾られている。

因みに『國酒』とは、1972年日中国交回復で、中国側が國酒「白酒(ぱいちゅう)」で日本側を遇したことに、大平正芳内閣総理大臣が日本酒を「國酒」とし、以来歴代の総理大臣による揮毫(きごう)された色紙を日本酒造組合中央会に渡すようになった。

緩やかな坂を水路に沿って下っていくと、滾々と湧き出す清らかな泉があり、壁面にはこよなく酒を愛し、当地で歌を詠んだ若山牧水の歌碑がひっそりと掲げられている。

しらたまの齒にしみとおる秋の夜の

酒は静かに飲むべかりける

門前にひと際立派な酒林を掲げているのが、武重本家酒造で牧水もその銘酒「御園竹」を詠っている。

よき酒とひとのいふなる御園竹

われもけふ飲みつよしと思へり

武重本家酒造の入り口、玄関、中庭、長く続く黒塀は、信濃茂田井の自然と歴史に溶け込んでいる。因みに、山田洋二監督の「たそがれ清兵衛」のロケ地に武重本店が採用されたと聞き、流石、山田監督、納得した次第であります。

新走（あらはしり）

酒蔵（さかぐら） 護る酒林

酔宵子

例えば源頼朝を輩出し八幡神社で有名な八幡太郎義家、長男は早くに亡くなり、二男の義親が嫡男とされていたが、義親は無類の暴れ者で、白河法皇に命で平正盛によって討伐され、三男は義国で、右近衛大将・藤原実能と争ったため、これも白河法皇によって関東の一隅である下野国足利(栃木県足利市)の地に追いやられた。まだ朝廷の強かった時代のこと。

平正盛に討伐された二男の義親は、頼朝の曾祖父に当たる。義親のあとが義、義朝と続き、保元の乱、平治の乱を経て源氏一門は衰退したが、頼朝が挙兵し鎌倉幕府をつくる。

さて、義国は足利の地で地元的女性を妻として、義重、義康の二子を得て、長男の義重が上野国(群馬県)東部の新田に移り住んで「新田氏」を名乗り、そのまま足利に残った弟の義康が「足利氏」を名乗った。なお、新田荘を掌中にした義重は「新田源氏」「上野源氏」と呼ばれた。

義家——義親——為義——義朝——頼朝

「義国——義重(新田氏祖)

「義康(足利氏祖)

その後の新田氏は、足利氏に比べて不遇な立場で、鎌倉幕府では大した役職にも就けなかった。三代で滅びた頼朝政権のあとを継承した北条氏に対し、新田氏、足利氏ともに、敵とみなして戦うが、共闘ではなく別々の戦いであって、実質的に鎌倉幕府(執権北条氏)を倒したのは新田義貞であった。

だが、征夷大將軍に任命されたのは足利尊氏で、北条氏を倒した新田義貞は、故郷の地を踏むことなく足利軍と戦い討ち死にする。

以上が足早に辿った新田氏の輪郭だが、一度は滅亡寸前ま

で行った新田一族だけに、その实在証明は難しく、新田氏を名乗ることで自らの出自(先祖)を奉ることが出来るといえ、これが初代團十郎家も、新田氏を名乗ることが出来たのではと『團十郎と海老蔵』の著者は推測する。

ここで石原家が何故に市川家の古文書並びに系図一卷を所有していたのか、それを『團十郎と海老蔵』を参照し述べたい。石原家は山梨県笛吹市一宮町一宮の旧家。祖を遡れば三枝家(三枝守国が始祖)に辿りつき、武田家より古い家柄だが、武田家が甲斐に入る前に没落する。ただし、子孫が石原、能呂、林戸、於曾、萩原など七つの氏に分かれて存続している。石原家は武田氏に仕え、子孫の石原弥十郎守治の代に武田家の侍大将になり、嫡男が石原藤兵衛守広で、この守治・守広の代に團十郎の曾祖父・堀越十郎家宣、祖父・重左衛門との親交が結ばれ、両家に縁組が持ち上がり、守広と重左衛門の娘が結婚した。

この娘は初代團十郎にとって「おば」、つまり父親・重蔵の姉か妹になる。守広と重左衛門娘との間には又左衛門守富が生まれた。石原家の当主は代々「守」を名乗り、三升に系図を渡したのが第四十九代石原守一である。

どうして市川家の系図が石原家に保管されていたのか。それは、堀越十郎家宣が下総国幡谷へ逃れるにあたり、武田残党の詮議が厳しく、系図に武田氏から受けた戦果の感状や、新田源氏出自であるという証拠などが含まれていたためだという。

したがって持つていくわけにいかず、捨てるに捨てられず、結局、石原家に預けのではないかと。三升は『演藝畫報』で述べる。次号へ続く。

絹の話 (121)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹の再利用

絹製品が古くなって使われなくなるのには色々な理由があります。

衣料品、小物等では色、柄、デザイン、サイズ等が年と共に似合わなくなつた。

よく使つたので汚れた、衿や袖、裾がかすれた。日焼け黄変した。虫に食われた。などが主な理由です。

呉服の再利用

十数年以前から、日本の箆笥に死蔵されている呉服が世界の美術館やアンティーク生地コレクター等に注目されて来ています。二束三文で放出された呉服が情報化時代を背景に、驚くほどの高値で取引される事が有る様になりました。今後30年後くらいには宝の山になる可能性があります。

昨今、ヨーロッパで和装（ジャポニズム）ブームが起こつてきました。

日本で放出された呉服がリメイクされて、和食ブームの後を追つて、若者から中年層中心に人気上昇中です。ヨーロッパのそれは呉服の形状を残した洋服仕様で、帽子やイヤリング、ブーツ等にもマッチするものです。

日本でも呉服を洋服に仕立て直して着る人は増えていますが、デザインは呉服地を洋服に仕立てたもので、両者の指向は正反対です。

京都に日本の呉服地（帯など含む）をイタリアで小物入れなどに加工して販売している所が有りますが、デザイン、金具などが日本のそれらとは一味違い、人気を博しています。和装地の再利用は世界の人達とコラボしたらいかがでしょうか。

呉服の再利用の留意点

使用済の呉服は上記した様な難箇所がありますので全てが均等に使えない事が多々あります。

生地幅が小幅なので洋服仕立にはデザイン面の配慮が必要が必要です。

染め直して着る

戦後しばらく、呉服は各家庭で年相応に染め直して着ていました。今は場所も手間も大変です。

ブラウスや洋服は色が派手で着られなくなつたら、そのまま泥染めなどにすると再利用ができます。

普通には泥染めなど出来ませんので、錆びた釘など入れた日本茶の煮出した染液で染めると、黒っぽい色が重なり意外に年配の人の好みに仕上がります。

機能性利用の生活用品を作る

絹は人に必要な18の必須アミノ酸で出来ている親和性

素材で、数々の機能性を持っています。その機能性を利用した身の回りの物を作ってみると良いと思います。切り傷当て…絹の端切れや黄ばんでしまつて使わなくなつたハンカチなどは小さく切つて保管して、怪我の箇所直接当てて包帯やバンドエイドをしてください。抗菌性効果により、化膿予防になり、皮膚の再生も早いです。

心地よい空気

…絹を家の中に（なるべく多く）暖簾や壁材などに使用すると、木の下にいるように気持ちしが和みます。

幸せホルモンの分泌・活性酸素の中和

…絹糸は細くて柔らかいので人が触るとマッサージを受けた時と同じように、オキシトシンと云う幸せホルモンが分泌され、気持が和らぎます。これを楽しめるにはなるべく柔らかく大量の絹に包まるとよくわかります。古い使い忘れている真綿などがあれば枕の中綿にすると幸せを感じます。綿など厚めの物をシーツなどにしてなるべく身近に使うと他の繊維にはない、気持ちよさを感じます。同時に絹に僅かに含まれる2種類のアミノ酸が余剰になつて老化現象などを促進する活性酸素を中和するので、疲労回復、肩こり解消などに効果があります。低体温防止…絹は保温性に優れていますので、絹を着る

と低体温に陥りにくく、捨てられるような絹の古布でも機能性は衰えていませんので、災害避難所に地域の高齢者の数だけ備蓄したら災害対策に役立つと思われれます。鮮度保持…絹で野菜果物を覆うと、しおれや追熟が抑制されるので、使い古された絹の端切れやストールなどを被せておくと効果的です。また、鮮魚などを冷蔵庫のない時、絹で巻いておくのも鮮度保持に役立ちます。

肌荒れ防止…絹の繊維はおむすび型（家蚕）扁平型（野蚕）など丸くありませんので、不要になつた絹布を丸めて触っていると、手などがツルツルしてきます。顔などあまり強く何度も拭くと鼻の先が赤くなつたりします。

防臭効果…絹のマスクは臭いの発生を防ぎます。古いネクタイなども再利用して下さい。

防腐効果…お餅などカビの生えやすい物を絹で巻いておくと防カビ効果が見られます。

緩衝効果…不要な帯揚げなど、枕に巻いて寝てください。地震など就寝時の避難に、枕に巻いた絹を頭に巻いて避難すると、途中で物が当たった時少しでも傷を浅くします。

プセルです。絹は蛹が生き延びる優れた機能性に満ちた生命保持力美しく装う事以上に健康維持に役立てましょう。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2020年11月6日

アルコール消毒で手あれを防ぐ方法

気がつけば11月です

今年は四季がはつきりして

すこしやすーいと思いきや予想以上の寒暖差に

大きく体調を崩す方も多く感じました

例年通り冬になれば気温も下がり湿度も下がります

とこのころは

ウイルス達が活発になってきます

これは毎年の事なので自己防衛していかないといけません

今年はマスク アルコールがやっと普通になり

風邪やインフルエンザなどの感染率は下がると思いますが

しかし冬になり乾燥してくるとアルコールが手にし

たりしてついついチャチャッと軽く付着するだけになっていませんか？

そこで前回の 本田のひとり言 に書きましたが

ワセリンの登場です

まずは ワセリンで手に下地を作ります

これも再登場ですがアトリックスなどのハンドクリームをその上から塗っていき

そうする事でアルコールをしても手があれる事がなくし

みません
手を洗っても下地のワセリンは残っているので

もう一度ハンドクリームを塗れば元通りです

もしワセリンやハンドクリームを塗り忘れた時は

ウイルスは指先に多く付着しやすいので

手荒れが酷い方は指先を念入りにアルコール消毒し
その他は軽くし手荒れを最小限に抑えま

しょう
今日も笑いながら行きます

2020年11月4日

乾燥から肌を守る ③

前回 前々回に引き続き今回も肌編です

先ずは

着るものなんです

化学繊維より天然素材を着用するということ

特に肌に当たる着衣は天然素材をお勧めします

肌着など化学繊維が多いのですが

肌着は肌に密着時間も長く大切な部位(弱い部位)を

守るものです

ですので

天然素材100%がお勧めです

これからの時期

温かい化学繊維を服の下に着込みたいですよ

ただ

乾燥して弱った肌に化学繊維は中々の負担になります

今まで大丈夫だった方も今年の気候の変化に身体が弱
り皮膚の問題を発症する可能性もあります

少し前と違い

各メーカーから天然素材の温かい肌着も出ています

これからの乾燥と寒さから肌を守っていきましょ

今日も笑いながら行きましょ

「江上浩二の独り言」 36 江上浩二

Twitterを利用して十年

私が twitter を利用し始めて今年令和2年で十年目、使い始めた2010年に以下のようなことを記していた。

(原文のまま)

タイトル：「Twitter in 2010

今年から使い始めた twitter。使い方が分ったような気がした。それは決して世間で言う善し悪しの議論ではなく、自分なりの使い方のパターンが出来て来たというのが実情。

SNSの言葉を使うと、リアルなフォロアーは少なく、バーチャルでリンクして頂いた極めて少ないが、replyとしてコメントを提供して頂く方、知り合いの知り合いの関係でフォロアーになった方々である。

他のSNSと違う点は、他なるマスメディアでなく、自分が関わっている仕事の関連企業、業界団体が発信す

る twitter を一つの情報ソースとして受け取れる点であり、そのような企業、団体をサーチして、自分のコンサルの仕事の確固たる secondary source の候補としてある。それら発信情報の真偽を確認する作業は、その twitter を鵜呑みにせず必要である。

また、最近かなり多いのは、売り込み、営業の為の follower リクエストである。スパム的だとか、悪意はないのだろうが、営業売り込み側がネット上で容易くサーチ、リンク出来るので marketing ツールとして使っているのだろうと思う。

古い言葉だがネットサーフをしていたら、自分の twitter の自動分析をしていてくれたサイトサービスがあり、こいつ（私のこと）の呟く時間帯の傾向ははっきりしているとおった。すなわち、私は自宅PCだけでしか呟かないので、早朝起床の時間帯（5時前後）、出かける前の時間9—10時ごろ、帰宅後の夜6—7時ごろ、就寝前の夜11—12時ごろに1000を最近超えた呟き件数の統計グラフがきれいに並ぶ。外で、モバイルから呟くタイプが今や主流である twitter からすれば、ひどく古めかしい化石的な存在と自負している。

前のブログでちょっと囁いた事がある、twitterの新しい評価基軸の whuffie factor が最近ではあまり、話題に上がっていないのではないかと感じている。Cory Doctorow や Tara Hunt のオリジナル、バイブルの本でいう、自分の評価、評判の価値を示す、一種の通貨であり、その増減する仕組み、bankへ登録される仕組みのようだが、日常この twitter で呟きながら whuffie factor がどうのこうのとは皆さん気にしていないと思う。

約11カ月間呟いてみて、自分のスタイルが出来ていると思えば、呟きでなく、囁きでもいいし、140文字の作文であつてもいいし、気に入った情報の転送でもいいし、人が何か新しい事に挑戦して、今までの自分が少しでも変わったと言える範疇の影響を受け止める事が出来れば善しとしたい。

最近試みているのは、海外の英語サイト情報を、簡単な和文付きで紹介するような retweet をしている。英文をそのまま retweet するより、短い和文説明があれば、少数であつても受け取り側の興味をそそればと思つている。

2020年時点でペースは結構落ちているが呟きは6000件を超えて、原稿を書いている10月30日には6011件となつていた。

60歳台の後半になると自分の呟きがレガシー、古びていると実感している。10年前に参照した評価基準の whuffie factor なんぞ全く聞かなくなった。本来の文字だけの世界、和歌四百分の140文字でいかに表現しようとする努力は虚しく消え、アプリのサービスに、写真、はもちろん、種々の形式の図面、動画などが付加され、ユーザは呟きというよりは容易に自らを売り込める形式に“進化”した。

ユーザのニーズが変わつてきているのは確かで、個人ユーザより、marketing・promotion 目的の団体・組織、企業、政治団体、大使館までが呟き発信している。ニセ情報（ニュース）を簡単に発信できてしまうとSNS (social network service) は叩かれるが、性善説の方を私は優先し、色々な意味で効果大、影響力大なりと想つている。

米国大統領のTrump氏もユーザで、この独り言が公知、印刷されているときには、彼が大統領の椅子に再度座つているのが判明している。

漢詩研修 (五十)

千代田岳精会 平井茂行

夜坐す

王守仁

独坐す 秋庭月色新

乾坤何れの処 更に閑人

高歌 度つて清風と与に去り

幽意自ら流水に随て春

千聖本無し 心外の訣

六経須く松を鏡中の塵

卻て憐れむ 擾々周公の夢

未だ及はず 惺々陋巷の貧

【作者】 王守仁（一四七二—一五二八年）・中国、明代中期の思想家、政治家。字は伯安、号は陽明、ふつう王陽明とよびならわされる。浙江省余姚（よよう）の人。父は南京吏部尚書王華。一四九九年の進士。明朝教学体系の中樞を占めた朱子学の權威に疑問の投げかけられはじめた思想・社会状況のなかで、王守仁は思想形成をなし、独自に良知心学を樹立して、強烈な朱子学批判を行った。ために思想界は朱子学の呪縛から解放されて、かれの出現以後の思想界は百花斉放の觀を呈した。一方で武將としても優れ、その功績は「三征」と呼ばれている。

【通釈】 秋の夜、独り庭に下りてそぞろ歩きを楽しめば、折から月が冴えて氣自ら清涼である、この静かな境地ひたっているものは、はたして何処に居るだろうか。月に向つて詩を高らかに吟ずれば、歌声は清風に乗って遠く流れ幽玄な心境となつて、のどかな春の水の如くである。幾千もの聖人があらわれても所詮は自分の心に悟りの秘訣はなく、また儒学の基本たる六経も結局は我が胸中の塵を払うものでしかない。いたずらにあの周公たらんと夢見ても、それは当世には通用しないことを悟つて、それよりもむしろ、あの孔子の弟子の顔回のように貧困の中でもそれに甘んじて、そのうち静に吾道を楽しむのには及ばないのだ。

『もうひとりの楠戸さん』

中屋保之

有名な大原美術館などで知られる岡山県倉敷市の美観地区と呼ばれる域から、少し離れたところに東町ひがしまちという静かな佇まいを見せる一角がある。この佇まいが堪らなく心地好い。いや、好かった。というのも、私の知っている倉敷は、ほぼ二十年前になる。ちよつと気になる喫茶店を雑誌か何かで知った。『夢空間はしまや』という店名に惹かれて、単身赴任中の私を監視(?) するために倉敷に来ていた妻と出かけた。住まいからぶらぶらと、美観地区を抜け、鶴形山という標高四十メートルほどの阿智神社を祀る山の横を通る。この神社には、剣聖宮本武蔵が權を削って捨てたと謂われる木刀と同形のものが奉納されていた。また、樹齢五百年と伝わる「阿知の藤」がその季節になると鮮やかな藤色を見せてくれる。歩を進めることにする。



町家や土蔵を改装した住居やお店が立ち並ぶ本町を抜けて、東町に入ったところにある建物が、平成八年「文化財登録原簿」に岡山県第一号として登録された有形文化財「楠戸家住宅」、明治二年創業の屋号『はしまや』という呉服店である。

その脇の長い路地を入って突き当たりが目的の、米蔵を改装したギャラリーカフェ『夢空間はしまや』である。お茶を飲みながら楽しく過ごせる場を色々な人と共有したいというオーナーの夢を現実化した空間だそうである。木造りの暖かさ、吹き抜ける

解放感がつつい長居をさせる。ジャズやギターの弾き語りなど色々なジャンルのコンサートを開催することもあり、私たちも岡山の楠戸さんと一緒に演奏を楽しんだ。聞けば遠い縁戚に当たるとかで、勝手に親近感を感じている。この店のオーナーは、楠戸恵子さんと仰る素敵なご婦人であった。いや、今でも素敵なままであろう。さほど懇意にお話をした訳ではないが、ひと言ふた言交わしていただいた語調に好感が残っている。聞くところによると、神戸のご出身だそうである。ご本人だったか周りの人にだったかに伺ったような気がするのだが、定かではない。どんな縁で倉敷の旧家へ嫁がれたのか…

偶然、楠戸恵子さんの母校への寄稿文をネットで拝見した。人柄の良さと人脈の広さに感服している。中で、会津八一の「おほてらのまろきはしらのつきかけをつちにふみつつものをこそおもへ」がお好きとの記述をされているのに驚いた。私も好きで、つい先日の満月の夜、友人と中学時代に修学旅行で唐招提寺を見学した際、八一の歌碑を探し当てた時の感動を話し合っただけである。

平成十四年の六月、楠戸家中庭にある樹齢二百数十年の「さつき」をこの時期に限り一般公開しているというので出かけてみた。ややもすると薄暗い旧家の部屋の先に、それはそれは見事な「さつき」がスポットライトを浴びたような鮮やかさで観る者の目を楽しませてくれた。

残念なことに、私の妻はこの景色を見ていない。翌年四月、私は約三年の単身勤務を解かれ東京へ戻った。

小春好景しょうしゅんこうけい

殿山木風

台上暉暉だいじょうききとして 黄葉清こうようきよく

微風暖氣びふうだんき 春情しゅんじょうを覚おぼゆ

飛とび来きたる野鳥やちょう 一ひとたび鳴ないて去さる

心こころ憺たんとして還望またのぞむ 金港きんこうの横よこたわるを

小春好景

令和二年十月

臺上暉暉黄葉清 微風暖氣覺春情
飛來野鳥一鳴去 心憺還望金港横

(語釈) ○台上・台はテラス。○暉暉・日が明るく照る様。○春情・春ののどかな心持ち。○愴・やすらか。

○金港・横浜港。

※ 初冬の頃、向寒のみぎりか、限定するのは少し難しいが小春日和というものがある。日本は南北に長い列島だから季節感や風景が地方によって異なるから実際はどうなんだろう。

横浜の私の所では、「桜台楼主人」と自負ふるに相応しい、愛すべきテラスがあり、テラスを掩う桜木と周りの風景の中に、この小春日和をたつぷりと堪能することが出来る。

テラスの入り口の小さな書斎には日光が入ってあつくらいになる。だから明るい日差しをテラスであびるのである。微かに揺れる木漏れ日の中で小鳥の鳴くのを聞き、時折子供達が声を上げながら通り過ぎて行く。何とも言えない平和な気分になる。西南西の方向には横浜「みなとみらい」が霞んで見える。

ある年の事が印象に残っている。十二月二十九日だった。この年は晩秋よりあまり強い風が吹かなかったのか、ぼかぼかと暖かい日光をあびながら、見ると桜の木は黄色い葉っぱを一杯に付けていて、テラスにも地面を見ても落ち葉がないのであった。そして三十日の朝には天気が続いたのだけれど、まるでどさつと音を立てておちたように変に葉を落していたのである。テラスは分厚い絨毯と云うよりふわふわの黄色いお布団が敷き詰められたようだった。不思議な思い出となった。そしてこの時も小春日和というのかなと自問している。

訪ほう友ゆう

今泉由利

迢々ちようちよう 尽处つきるところ

碧山へきざんの頂いただき

万壑ばんがく 蒼茫そうぼう

古原こげんを歩あゆみ

塵外じんがいの幽居ゆうきよ

君きみが家いえに到いたる

丹心たんしんの唱和しょうわ

雲くもに連つらなる

迢迢尽处碧山巔

萬壑蒼茫步古原

鹿外幽居到君宅

丹心唱和興雲連

(語釈)

- 迢迢 || みちははるかに
- 万壑 || 多くの山谷
- 塵外 || 現実ばなれ
- 丹心 || まごころ
- 唱和 || 共に吟ずる
- 興雲連 || 雲に連なる

(詩意)

はるかはるか碧山の頂ちかくに居る
友を訪ねてゆく。
山を越え、谷を渡り、宇宙まで来てしまったかと。
ウエルカム挨拶は、合吟。吟声は高く高く
雲のはじっこに連なつてゆきました。

芭蕉と子規3

夏目勝弘

伊達の大木戸は、仙台領に入る険阻な道、甲冑堂をたずねる。この堂には、甲冑に身を固めた佐藤兄弟の妻の像が安置されている。

館の小降りのなかを、白石から岩沼（武隈）に向かい、能因法師が詠んだ武隈の松を見る。

門人の拳白が江戸の饒別句会で詠んだ「武隈の松見せもうせ遅さくら」の句を思い出し、

○桜より松は二木を三月越し 芭蕉

岩沼の宿から仙台へ、途中芭蕉は、笠島に藤中将実方の墳をたずねたいと思ったが、五月雨の道はひどくぬかるんでいたため断念し遠くより眺める。

○笠島はいづこ五月のぬかる道 芭蕉

そして仙台についたその日は、五月五日の「あやめの茸く日」でした。

仙台では、画工加右衛門と懇親になり、芭蕉に道案内を申し出た。

そして加右衛門に同道し、宮城野の萩を見に行く、野原一帯に萩の茂みがあり、秋の咲きごろを思いに浮べ、玉田や横野、ついでにつつじが丘の天神に詣で「古今集」の東歌にもある（みさぶらい御笠ともうせ宮城野の木の下露は雨にまされり）と詠まれた木下にも行きました。

画工の加右衛門は、松島や塩釜の絵などを描いてくれ別れるとき、紺染の布の緒をつけたわらじを饒別としてくれた。

○あやめ草足に結ばんわらじの緒 芭蕉

仙台を立ち塩釜へ、

画工加右衛門よりの絵図頼りに、十符の里、多賀城跡・壺の碑文・野田の玉川・沖の石・末の松原、塩釜、松島へと。

子規は飯坂温湯を立ち三三町行き、摺上川に出る。ここにかか

る橋は古歌（みちのくのつつな橋にくる綱のたえずも人にいひわたるかな）とあるような所であったが、子規は鉄の吊橋を渡り

○吊り橋に乱れて涼し雨の足 子規

向い側（涼しさや瀧ほとはる家のあひ）

と詠み、宿に帰り午睡をする。夢中に二句を得る（涼しさや羽生えそうな腋の下）と記す。

人力車にて桑折に出る。

○人くずの身は死にもせで夏寒し 子規

桑折より瀧車に乗り、大木戸を通り越し岩沼に下る。武隈の松もかなと聞き行かず。

実方中将の墓所を地図を按じ町はづれを左に曲りひたすら笠島へ名に高き笠島の道祖神社にて

○われは唯旅すゞしかれと祈るなり 子規

田中道を数町行き塩手村の山陰に墓所あり、其側に西行の歌碑あり（枯野の薄かたみにぞ見る）と詠みしはここ、哀れに覚え行脚の行末を祈る。

○旅衣ひとへに我を護りたまへ 子規

をして仙台へ、病の疲れ旅路の草臥れか、朝昼夜もいとわず、ただひたすらに眠る。

○月に寝ば魂松島に涼みせん 子規

翌日、つつじが岡に遊ぶ。仙台駅のうしろ方にあり、松島まで子規は二十二日、汽車、人力車を使う。芭蕉の跡は停車場より遠い場所には行っていない。

「はて知らずの記」の旅の目的は、「おくのほそ道」を辿るのが第一の目的ではあるが（みちのくへ涼みに行くや下駄はいて）と、汽車が根岸を過ぎる所で作った二句のように、

松島までに、六二句を作り、そのうち（涼）を作った句は、初句十五、二句三、五句十句、ある。でいなみに松島から象潟まで四八句中五句のみ。

「氷魚」のことから (239) 岡本八千代

ついに、茂吉(32歳)は輝子(18歳)と結婚した。大正三年(1914年)四月のことである。

式後、まだ三月しか経っていない七月二十六日に、茂吉は、九州大学病院に入院中の長塚節(ながつか)に手紙を送ったのである。その中に、

○「これでも小生の頭のでっぺん益々はげ、ひげに白いのが四本出来ました。今もおもいます。この世で一人のたふとい女人が小生とつれそふたならば、小生は何も彼にも黙ります。」などと一節もあつたほど。

○ある時、中村憲吉(茂吉より七歳年下の親友)と輝子(てるこ)と茂吉と三人で帝展をみに行った。その時、茂吉と輝子が時々立ち止つて、ヒソヒソ話を交えているので、憲吉が何事ならんときき耳をたててみると、茂吉が「その着物は派手すぎる」と輝子に叱言を言っているのであつた。

何と言つても、輝子は青山脳病院の令嬢であり、学習院出のインテリのしかも緋牡丹の花とささやかれたほほの嫁さんであつた。

茂吉がアララギの歌の方に情熱を傾むけて創作に励んでいても、輝子はそのことには何にも言はずに、茂吉の好きな放だいにしていたらしい。インテリの女性であつたのだし。何か言いたかつたかもしれないが、短歌の創作のことには何も口を出さずにいた嫁さんであつたらしい。そして、息子

の茂太や杜夫たちにも、明るく、大らかに接していたらしい母親でもあつた、と私は思う。

茂吉は、「日本詩人全集10」(223頁)の「妻」について書いている。

○妻は矢張 *sexus sequior* と見立てなければつまりは満足は出来まい。さういふことを考へずに済む亭主は、温良で小さく美しくて京人形のやうな妻を有つてゐるものに相違ないとおもふ。

○女を甘やかす 今の欧羅巴(ヨーロッパ)の Dame、社会状態は、全亞細亞人からも、それから古代ギリシア、古代ローマの人々からも、嘲笑されるにきまつてゐるといつたシヨペンハウエルは、若くして恋慕の息吹をかけられなかつたと同時に、年老いても罪深い女人どもの懺悔(ざんげ)を聞いてやらねばならぬカトリックの坊主の役をつとめなくとも好かつたのである。

○シヨペンハウエルは、女といふものは足の短い肩の狭い(せう)臀部(おし)ばかり大きいものだと言つた。それはヨーロッパの女を罵つた言葉なのである。

○僕は西暦1924年の初秋から鼻の低い足の短い妻を連れてヨーロッパの大都市を歩いていた。

○シヨペンハウエルが罵倒(ばうたう)したヨーロッパの女どもども、僕の妻より器量が好い。それを逆に言えば、僕は、黄顔細鼻の男に過ぎない。シヨペンハウエルに比べるなら、所詮僕は不器量に相違ないゆゑに、諦念して妻と僕は一緒に歩いてゐた。そして妻は懐妊(ばう)していた。(流石の茂吉?)

編集室だより【二〇二〇年十月】

今泉 由利

- 生れ育つた家は、玄関、待合室、薬局、診療室、…応接間…と続き、家族の住居になるといふ構造だった。
「手を洗いなさい」と母の言葉に満ちている環境だったから、自分の家の中の「ばい菌」退治は得意だけれど、ひと度、外に出て、目に見えない、得体知れない「ばい菌」にはどぎまぎしてしまふ。
- 斯くなる上は、自分のバリア度を高めることと心得、知る限りを尽くしているつもり。
- 約百五十億年前、時間も空間も存在しない状態から、高エネルギーの小さな点から、一気に膨らみ、大爆発を起こし、膨張を始めたところ宇宙のはじまりをいう。
- 宇宙の誕生から十億年たち、銀河が形成されてきて、現在の宇宙の姿になってきたと。
- 約四十六億年前に、岩石の解けたもので覆われた星だったという地球の誕生。
- 海が出来、二酸化炭素が海にとけ込みはじめる。
- 三十五億年〜五億七千万年まえ、最初の生命が海の中で誕生し、ラン細菌という生物が酸素を作り出す。
- 先カンブリア紀・生物が爆発的に進化を始め、脊椎動物の遠い祖先が現われる。
- 三億六千二百五十年〜二億九千万年前、石炭のもとになる植物、シダ類が地上を覆う。巨大昆虫が栄える。両生類から、は虫類へ進化が行われる。
- 二億四千五百万年〜二億八千万年前、恐竜とほ乳類が現われる。最初のカエル・ワニ・カメが現われた。
- 二億八百万年〜一億四千五百万年前、超大陸パンゲアが南と北へ、分離を始める。
- B・C五千年頃、エジプト文明が発生。
- B・C四千年頃、エジプト暦創始。これより太陽暦が始まり、一年を三六五日と定まる。
- B・C五二三年、インドで釈迦が悟りを開く。仏教の始まり。
- お釈迦様が、宇宙はじまって以来、どのあたりにいらっしやったのかを知りたくて。お釈迦様の辿つて来られた様子を思いながら、彫っているのは、本当にうれしい。賽銭や、自分の都合をお願いするのではなく、お釈迦様の二千五百年を知りたかった、思いたかったから、彫っている。

野菜・果物・まんだら (34) 蓴菜・ジュンサイ

学名 *Brasenia Schreberi* スイレン科・ジュンサイ属



- アフリカ、オーストラリア、ヨーロッパ以外の温帯地域に、分布。日本では全国各地に生育。
- 淡水の池や沼に自生。多年草。水底の沼の中に地下茎がある。そこから茎をのばす。葉は葉柄が裏側についた楕円形で、水面に浮かぶ。
- 茎、葉柄の裏に、寒天質の粘液でおおわれる。
- 水面に伸びた花柄の先に2cmほどの暗紅紫色の6弁の花を咲かせる。
- 初夏、葉と茎を採取し、ぬめりを落さないよう、軽く洗い、食用にする。
- 瓶詰などにして保存出来る。
- 解熱やむくみのあるときの利尿作用。
- 蓴についての記録は、正倉院文書中にみられる。天平宝字八年(764年)の銭用帳に、「六十二分蓴、六弁」。宝亀二年「一貫文蓴二斗直」など。
- 「古事記」には、応神天皇が太子仁徳帝に酒を賜った際詠まれた(みずたまる依網の池の堰杭うち・・・蓴くりはへさくらしに)。
- 「万葉集卷七、一三五二」(わが情ゆたにたゆたに浮き蓴岸へにも沖にも寄りかてまし)。
- 平安時代の辞典「新撰字鏡」には蓴として「本草和名」には菜として、「和名抄」には菜蔬の中の水菜の一つとして。和名沼奈波、水菜や自三四月至七八月通名 糸蓴味甜体軟霜降以後至二月名環蓴味苦体洪
- 室町時代「下学集」(1444年)初めて蓴菜、ジュンサイとあり「倭訓栞」(1774年)。
- ジュンサイは、酢の物、辛子和え、すまし汁などなど。ひとびんのジュンサイがあり、今夜のお酒に!と思ったら古事記、万葉集にまで、さかのぼれ、うれしくなってしまった。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒114・0021

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (03) 5924・2065

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒114・0021

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。